漢詩を味わう

第53回

子夜呉歌　其三

李白

長安一片月　長安　一片の月
萬戸擣衣聲　萬戸　衣を擣つ声
秋風吹不盡　秋風　吹いて尽きず
總是玉關情　総て是れ　玉関の情
何日平胡虜　何れの日か　胡虜を平らげて
良人罷遠征　良人　遠征を罷めん

長安の夜空にさえる一片の月。
都中の家々のあちこちから響いてくる砧を打つ音。
秋風はやむことなくいつまでも吹き寄せる。
月、きぬた、秋風、すべて玉門関にいるあなたを思わせるものばかり。
ああいつになれば、胡虜を討伐してあなたは遠い戦地から帰れるの。

《一片月》　一つの月。片割れ月ではない。
《擣衣聲》　砧の音。絹布を平らな石の上などにおいて木槌でたたいて、なめらかな練り絹にして衣服に仕立てた。
《玉　關》　西域からシルクロードを通って中国に入る時の最初の砦、玉門関。

西域遠征に遥か遠く赴いている夫を思う妻の様子を詠った詩です。李白が長安にいたころの作品とすれば四十二、三歳頃で、当時は翰林供奉という役目で玄宗皇帝に仕えていました。西域遠征を題材とした辺塞詩や、この詩のように遠く離れた愛しい人への思いをうたう閨怨詩はこの時代、多くの詩人に詠まれています。

子夜呉歌はもともと呉（揚子江下流地帯）すなわち南方の民謡で、晋時代の子夜（女性の名前）の作った楽府題のひとつです。楽府題は一口にいえば民間歌曲の歌詞で、李白の時代にはすでにその殆どが歌われなくなっていたと考えられています。唐時代の詩人は、さかんにその題を使って詩を書きました。すでに音楽として耳で聞く機会はなくなっていて、残存していた歌詞からの感興を得て新作を出したのです。唐時代の詩人たちにとって楽府題は一種の練習問題みたいなものだったようです。

基になった子夜呉歌（子夜四時歌ともいわれる四連作）は明るい江南の風土のなかでの愛や失恋を甘美にうたうものでした。それを李白は舞台を北の都、長安に移し、民謡の活力を取り入れた新しい形の閨怨詩に仕立て上げました。李白の子夜呉歌も春夏秋冬の四連作ですが、この秋の哀しみをうたう詩が最もよく知られています。

「いま眺めている月はもしかすると夫もまた見ていることだろうか。砧の音は冬衣の用意。厳しい冬を迎えようとする夫にも冬衣が要るだろう。そして吹き寄せる風は夫のいる西の地からやってきたもの。」

月、風と砧。これらはどうしても玉門関への思いにつながってしまうのです。秋のもの淋しさや、やるせなさが最後の二句に凝縮されて、妻の思いを一層強く伝えてきます。

民謡の味わいを活かして創られたこの詩は、古い皮袋に新しい酒を入れて銘酒を醸したといわれます。詩仙李白の面目躍如たる名作です。

雁塔聖教序

天地の陰陽に苞まれて、而も識り易きは其象有るを以て也り（第四部は前半七文字を半切1／2に臨書）

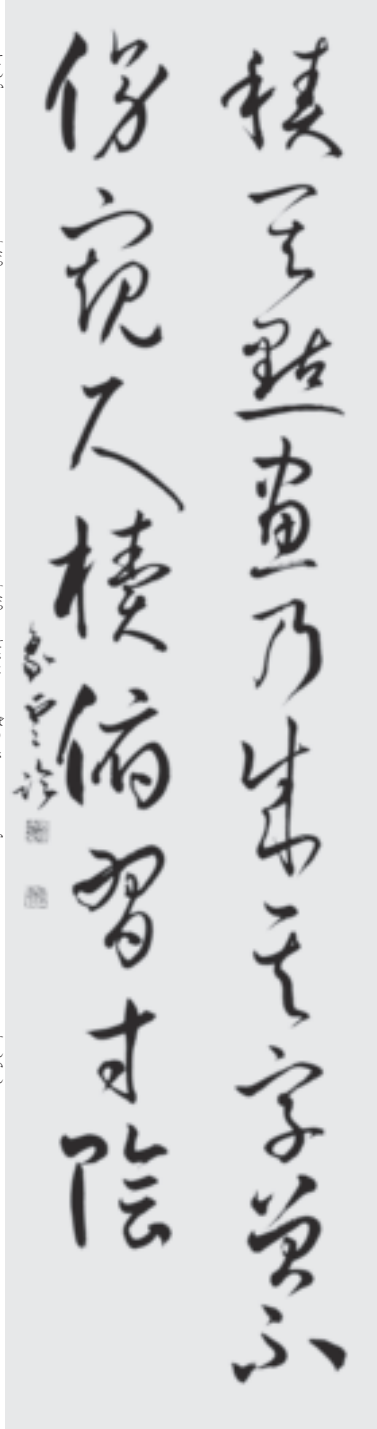
今回の課題は一画が切断しているようにも見える「陽・而・易」など線質の把握が難しい。しかし余り神経質な線にすると、雁塔本来の整斉ながら躍動的な雰囲気が表現できない。幾分原帖より太めの線として安定感を加えた。

集字聖教序

隠れたるが若く、顕れたるが若く、百福を運して長く今なり。妙道玄を凝らし……（第四部は前半七文字を半切1／2に臨書）

幾度となく述べているが、本帖は集字のため各体混在し、また文字間の気脈がなく大小にも違和感がある。これを念頭に全体の調子を整えたい。原帖よりも更に一歩踏み込んで行意を加味して運筆したほうが纏め易い。

書　譜



其の點畫を積まば、乃ち其の字を成すと云いて、曾ち尺櫝を傍窺し、俯して習うことを寸陰をもせず……

文字数が多いので、まず布置に苦労すると思う。結体はさすがに美しく確かなもので強さと暢びやかさを兼ね備えている。左行の櫝・傍・俯の各偏は、料紙の折り目に起因する側筆のため太くなっていることを念頭に臨書したい。

高臺夜色深く　月下清琴を聞く　能く座中の客をして　倶に塵外の心を生ぜ使めん　石泉寒碧に瀉ぎ　霜竹孤音を折る
曲罷んで長天静かに　言を忘れて一たび襟を整う

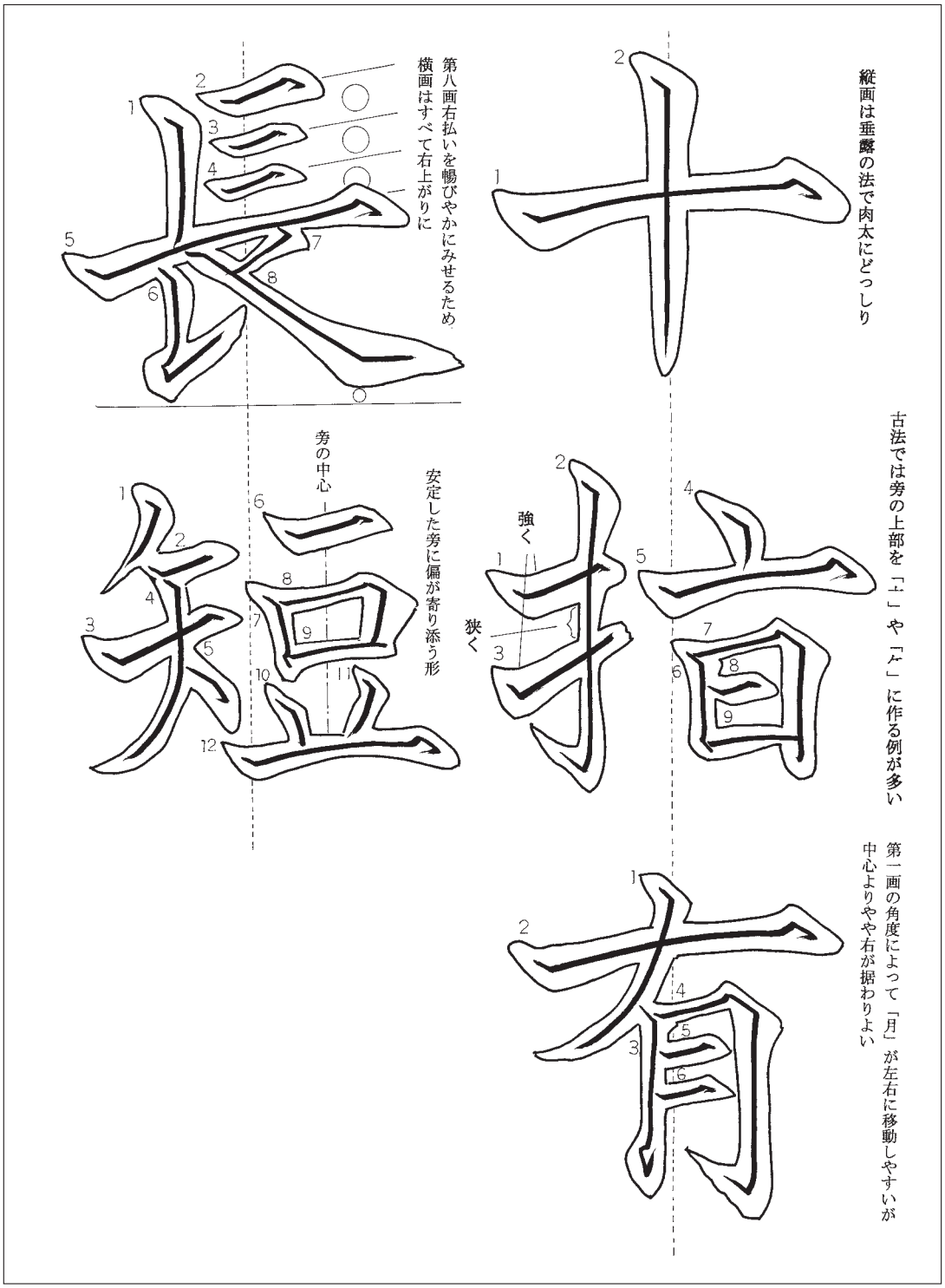
《大意》高殿の夜はしだいに更け、明月のもと、清らかな琴の音を聞いている。その美しい調べは宴席につどう人々の、俗世の煩わしさを忘れさせる。石の上をほとばしる泉は寒々としたみどり色を呈し、うっすらと霜の降りた竹やぶの辺りでひそかに竹の折れる音がする。曲が終わると座は一瞬静まり返り、人々は言葉を忘れて襟を正す。（允禧詩・月夜臺上聴友人琴）

随處に楽しむ

《大意》時と場所に応じて楽しみを見出す。（陸游）

読み　十指長短有り（ものには皆それぞれの特質が備わっている・劉商「擬胡笳十八拍」）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

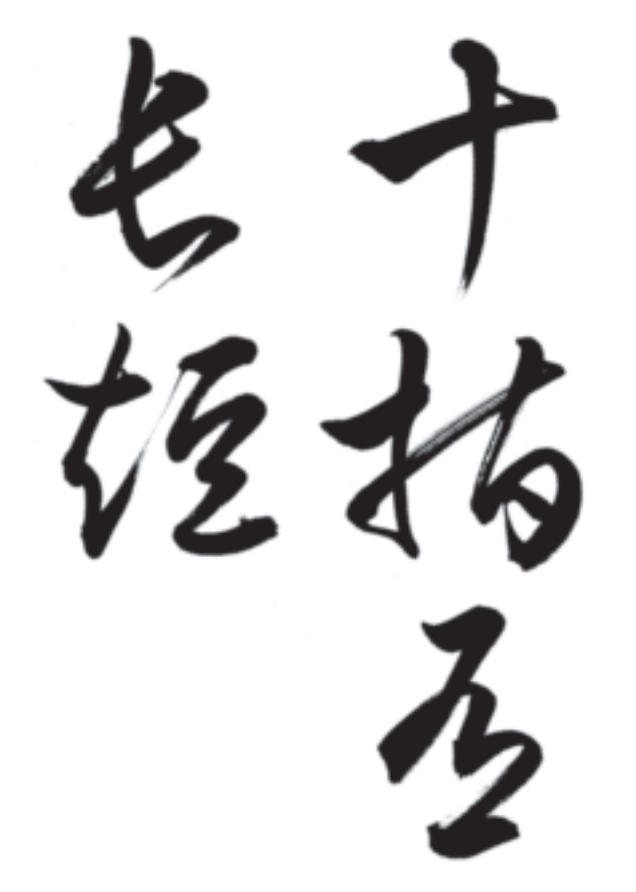
・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書



※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

時を識（し）るは今を知るを貴ぶ

ペン字部課題　（10月31日〆切）

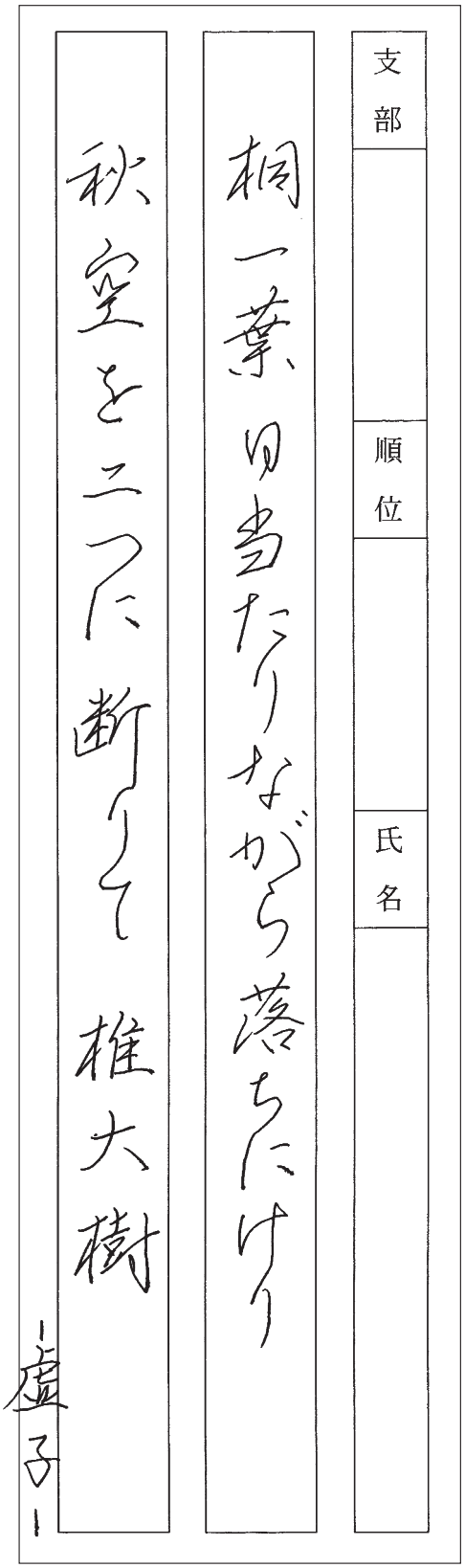
細字部課題　（10月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　シャクフンリゾク　ヘイカイカミョウ

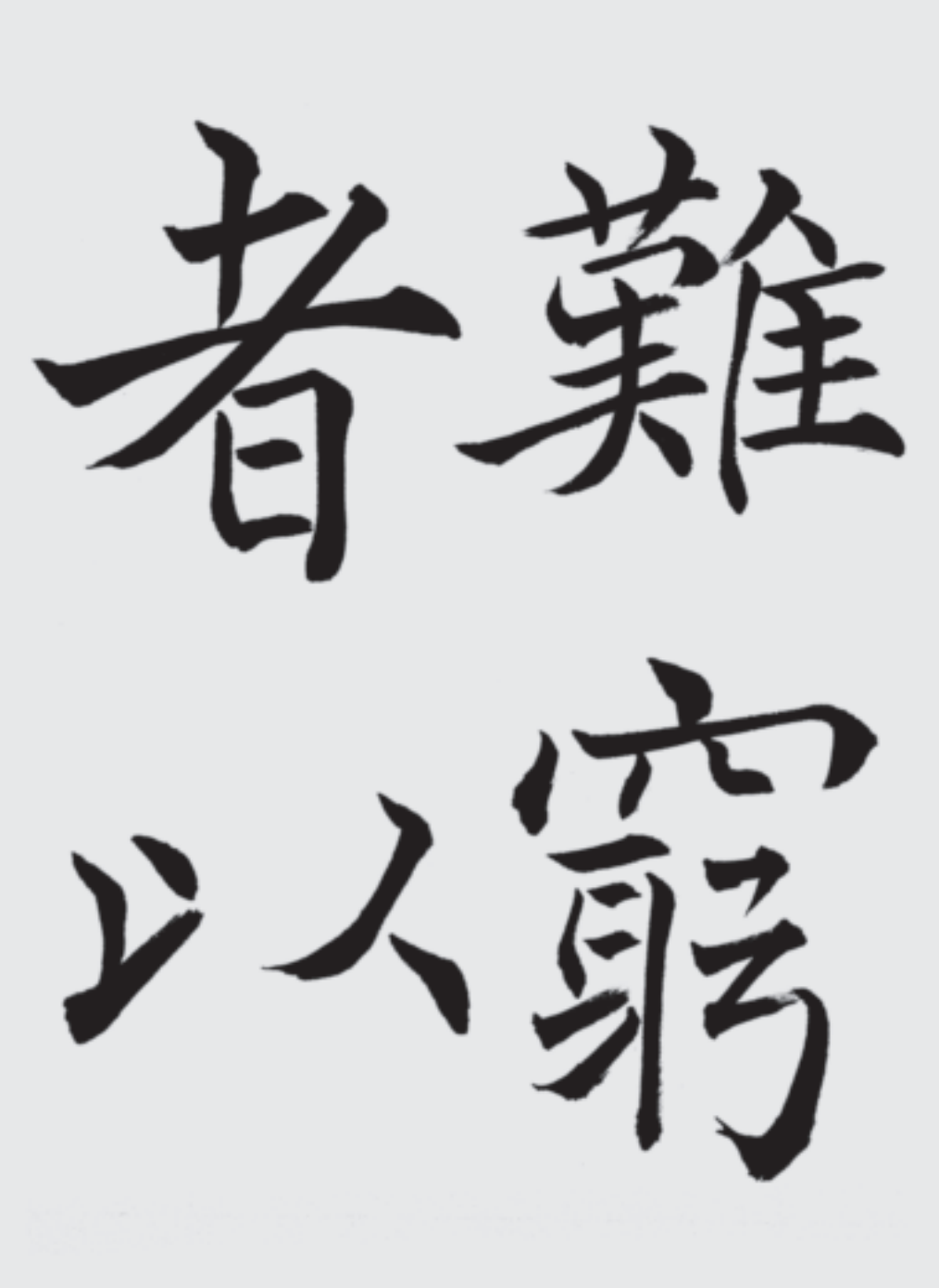
略解　布射以下の前回まで登場した人物は、紛争を解いて世俗に便利を与え、並びに皆、芸術の域に達して佳境に入った人たちである。



和泉溪石先生書

■褚遂良（ちょすいりょう）・雁塔聖教序（がんとうしょうぎょうのじょ）（初唐・西暦六五三年）の臨書(14)

窮め難きは（其の形無きを）以て……

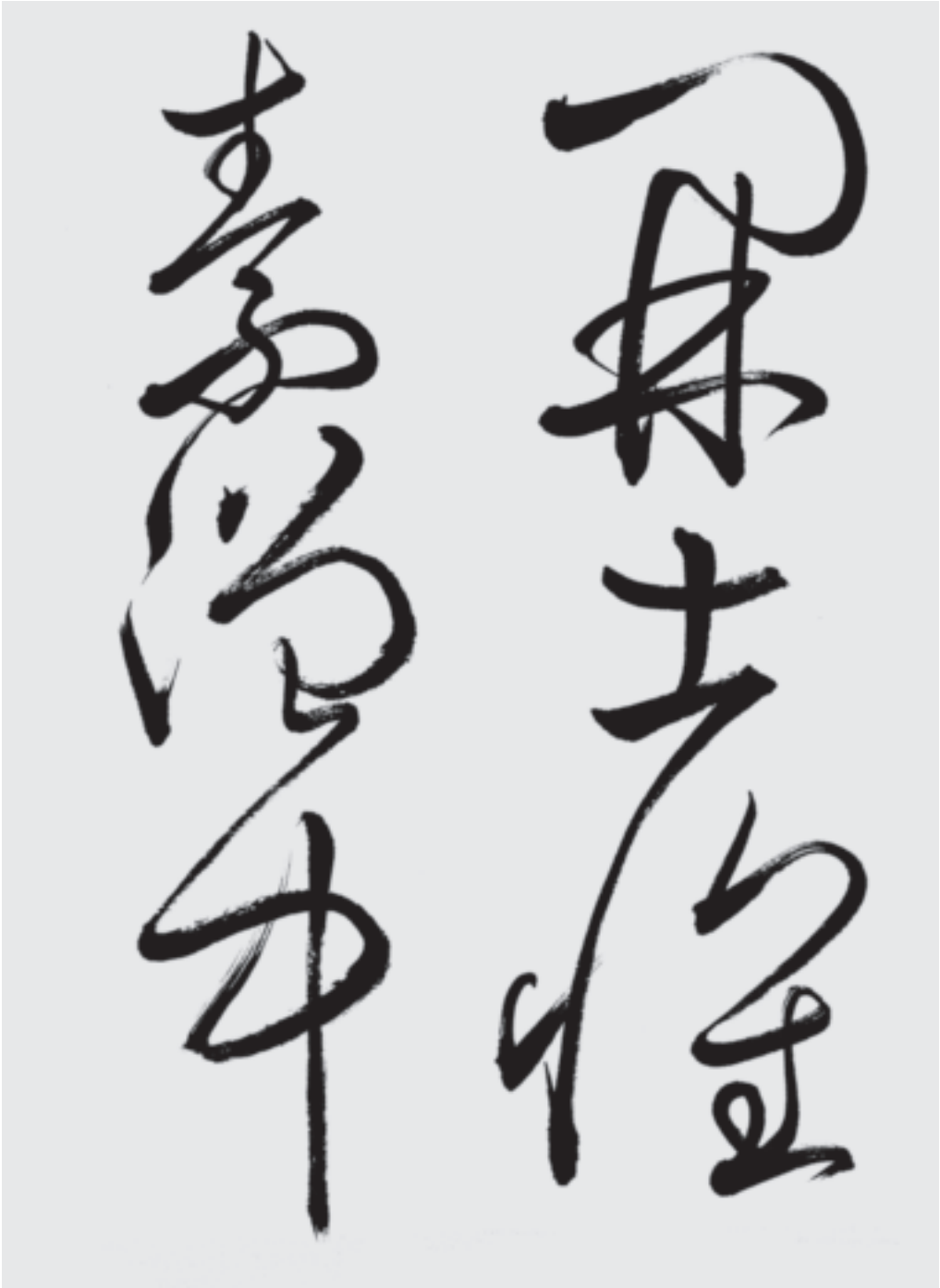


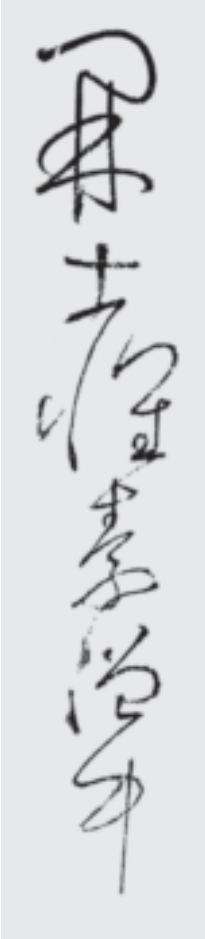
象雲臨

『難窮者以』

雁塔聖教序は「三蔵聖教序」と「述三蔵聖記」の二碑からなっていますが、西安の慈恩寺大雁塔の一階部分の左右二龕内にはめ込まれています。今から一三五〇年以上前に建てられたものですが、石質が堅いためか磨滅が少なく、現在でも鮮明な字姿を見ることができます。しかし、碑面の文字には傷にも見える修正線が多く見受けられます。これは褚遂良みずから修正したものか、後世になってつけられたものか、定かではではありません。しかしこの雁塔聖教序の拓本をもとに褚遂良の没後七年経過してから建てられたという「同州聖教序」は修正線を踏まえた文字が多く確認されていることから、建碑の直後に修正されたとする説が有力です。

さて、今月の「難」の隹の第二画縦画の収筆部分も修正線と思われる部分がありますが、拙臨は褚遂良が何らかの書法的な目的をもって修正したものと捉えて臨書しました。





開士懐素は僧中（之英）なり

象雲臨

■懐素（かいそ）・自叙帖（じじょじょう）（中唐・西暦七七七年）の臨書（6）

『開士懐素僧中』

この自叙帖は自叙とはいうものの、自分を叙するのは冒頭の僅かな部分で、大部分は諸家が懐素の狂草ぶりを歌った草書歌と、それらに冠した顔真卿の序文です。今月の文言は「求道者である懐素は僧の中の俊英である」という顔真卿の言葉を持ち出して、自己喧伝的色彩が濃い内容です。しかし懐素に対して当時多くの名士が、「懐素上人草書歌」と題するものを作って寄せているように、その実力と名声は巷に轟いていたようです。「張顛素狂」といわれるのは芸術的なイメージで、精神的異状ではないことは、日本で良寛が懐素を好んで学んだことからも解ることと思います。

今月の六文字は例によって運筆のスケールが大きく雄大で、縦直線の強さと、円転の大らかさを見事に交えています。今月は原帖で一行に書かれた部分を半紙二行に書いていますが、上部が大きく下方に従って次第に小さくなって右に流れいくのも自然な章法です。